秋草

いつしかに樫の裏葉に風光り尾花がわかく穂を出しけり
しろがねのもたひにさせる秋草の花紫にゆるぐ朝かな
月明き夕あかつき哀れなり露に亂るゝ秋の花草
ほのかなる朝の風にゆら〳〵と身丈のかぎりゆらぐ水引
病む人が白きしとねに端然と秋の草見る美しさかな
はかなげに異なるさまもなくて咲く水引草を好みそめにき
茅屋根の上に露草みだれ咲く家あまたあり初秋の村
燈籠の光の淡く秋萩のしげみを照らす夜のかなしさ
秋の野に咲ける花草手折れどもかざさで捨つる淋しき女
淡あかく尾花のならぶ細道に今日も夕陽を見に出でにけり
おほらかになみ立つ尾花さんらんと光れば午後の野邊の冷たき

L.

秋の鳥

秋の森君は眼を閉ぢ木によりて鳥の音をめで動き給はぬ

T.

秋の鳥なく日となれば出つといふ我が病に涙ぐまるゝ
小鳥來て御寺の庭の木犀を金砂の如く散らす朝かな
秋雨の眞晝淋しき鳥小屋の塀かたぬれて小鳥なかずも
むら雀榛の並木にわたり來て秋の夕陽に染まる靜けさ
秋の日のうすきに光る河原道小石渡りてとぶ千鳥かな
町に居ればすゞかけの實をけちらして小鳥のなくも嬉しかりけり
我のごと淋しかるらむ小鳥らは日毎葉のちる木を宿として
秋來れば事なき鳥の聲にだに遠き思のある心地する
九官鳥君が名呼べばこたへする秋の廊下のものゝ淋しさ

L.

夕の庭

ものゝかげうらはかなげに消えて行く夕の庭に萩の花散る
美しき秋のすがたをさやかにも水にうつしてたてる山かな
紅葉ばをひろひてゆかむこの山の今日を限りのわすれかたみに

S.